同志社大学 神学部・理工学部・良心学研究センター主催

公開シンポジウム

サイエンス、キリスト教、そして良心

自然科学とキリスト教は深い関係にあり、良心が両者をつなぐ重要な役割を果たしています。物理学者そして牧師としての経験をお持ちの有賀誠一氏と共に本テーマを深めていきたいと思います。

- 日時：2021 年 **12** 月 **4** 日（土）10:00 ― 12:00
- 場所：オンライン開催（Zoom）
- 講演：有賀誠一

1939 年京都に生まれる。同志社大学工学部卒業。日本、ドイツ、カナダでプラズマ物理学・核融合研究者（理学博士）、心理カウンセラー（心理学博士）、カナダ合同教会の牧師またチャプレンとして働き、カナダで隠退。地元のオーケストラの首席フルーティストとしての活動は続けている。

司会： 辻内伸好（理工学部教授）
コメンテーター:林田 明（理工学部教授）、 小原克博（神学部教授）

◎本シンポジウムは、ALL DOSHISHA 教育推進プログラム「社会実践のためのブレンディッド・ラーニングの構築ー「地の塩」プロジェクト」の一環として行われます。

問い合わせ　同志社大学 神学部・神学研究科事務室
Tel: 075-251-3330　https://theo.doshisha.ac.jp

講 師 略 歴

1939 年（昭和 14 年）8 月 17 日、有賀鐵太郎, ひでの四女一男の末子として京都に生まれる。

生家は、父方の祖父母の世代から、母方の曽祖父母の世代からのクリスチャン一族であり、また父親も母親も母方の叔父叔母も、全員が同志社出身であったので、当然のことのように姉三人の跡を追って 1952 年同志社中学校に入学し、続いて同志社高等学校、大学、大学院で学ぶ。

中学では工学クラブ、高校ではコーラスと室内楽（フルート担当）に明け暮れる。

工学部電気工学科に入学したが、理論物理学者の鳴海　元教授に勧められて核融合研究の基礎であるプラズマ物理学を専攻し、1964 年に修士号を得て名古屋大学プラズマ物理学研究所の助手となり、その 2 年後に京都大学工学部プラズマ研究施設に移籍し、トカマク型装置や高出力レーザー装置で発生させたプラズマの研究に従事する。その間、方向性ダブルプローブ（双極探針）を開発してプラズマを測定分析し、1070 年に広島大学から理学博士号を取得する。

大学 2 年生の秋（1959 年）に伊勢湾台風が発生したので、京阪神のクリスチャン学生と共に前後 4 回愛知県各地で救援作業に従事する。

大学・大学院生時代には、工場排水による第一（チッソ）第二（昭和電工）水俣病事件やイタイイタイ病事件（三井金属）などの公害・薬害の事実が次々と表面化したので、被害者への支援活動、特に甥も被害を受けたサリドマイド事件（大日本製薬）の被害児への支援活動に奔走する。

1965 年、同志社女子大ならびにテキサス大学大学院卒の英文学者、勝村叡子嬢と結婚し、一男一女を授かる。

1960 年代末の第二次安保条約改定を巡っての大学紛争は京都大学でも熾烈を極め、勤務先のプラズマ研究施設にも内紛が発生して研究生活にも支障をきたしたので、1973 年 8 月にミュンヘン郊外にあるマックス・プランク・プラズマ物理学研究所に転出し、さらに 2 年後にカナダのブリティッシュコロンビア大学（UBC）物理学科に移るが、1977 年秋から UBC 付属の神学校に入学し、４年後にカナダ合同教会牧師となり、カナダ各地の教会の牧師、また大学のチャプレンとして働く。2005 年に牧師を隠退し、カナダ合同教会系のセントポールズカレッジの特任教授となり、カナダメソジスト教会が設立した山梨英和学院や静岡英和学園の学生のための特別留学プログラムの立ち上げと運営に携わる。

また、ホノルル通信教育大学院に籍を置いて心理学を学び、2015 年に博士号を取得する。専門は人格論とスピリチュアルケア論。

趣味はクラシック音楽。現在も自宅のあるダンダス町の地域交響楽団（DVO）の首席フルート奏者をしている。

講 演 要 旨

「サイエンス、キリスト教、そして良心」という難しい演題がついてはおりますが、私はここで「科学とは？」「キリスト教とは？」「良心とは？」というような、アカデミックな議論をするつもりはありません。私がお話しすることは、私個人の８２年間の人生を振り返ってみたときに、「サイエンス、キリスト教、良心」というものが、私の人生とどのような形で関係してきたか、そして、そこに私自身がどのような意味を見出してきたか、というもので、言わば、ジョン・バニヤンの「天路歴程」ならぬ、私自身の「地路歴程」のようなものです。私の「生涯学習のおさらい」と言ってもいいでしょう。

８２年間の出来事を１時間以内でおさらいするので、光速に近いスピードで進まねばなりません。項目としては、

１）幼少期（戦中戦後）に体験したサイエンス、キリスト教、そして良心
２）遊びを通して芽生えた工学と創造主への興味
３）工学部での失望と希望　生涯の恩師との出会い
４）学者と良心
５）物理学者として「神」を説明する
６）キリスト教諸教派との対話（エキュメニズム）と諸宗教との対話
７）カナダ合同教会の特質
８）牧師とチャプレン
９）心理学とキリスト教
10）神の愛に基づいた良心

ですが、説明不十分なところはディスカッションと質疑応答の時間に補足させていただきますので、よろしくお願いいたします。

講演の最後に３分間のフルートソロ「ヒロシマ・ナガサキ追悼曲」の動画を流します。

「ヒロシマ・ナガサキ追悼曲」に託して

１９４５年５月２８日、アメリカの原爆投下地選定委員会は、京都を第一候補に選定した。その理由は、爆発によって生じる衝撃波と熱波が周辺の山によって反射されるので、原爆による破壊力が倍増することと、日本の古都である京都を壊滅すれば、その心理的効果は絶大である、ということであった。しかし、主要な軍事産業も軍事基地もない文化都市を壊滅させることには、選定委員会の中でも反対論があり、最終的に第二候補であった広島を第一候補に格上げした。

私は以前にもこの噂を聞いたことはあったが、その事実をはっきりと認識したのは、１９７５年、私がドイツからカナダに移動する途中で偶然手にしたオーティス・ケリー同志社大学アーモスト館長の研究報告を通してであった。そこには、アメリカ空軍が上空から撮影した、京都駅の近くにあったパンケーキ形の機関車の車庫が、原爆投下の標的だったと説明されていた。私の背筋に異様な戦慄が走った。

「もし最初の予定どおりに京都に原爆が落とされていたら、
今の自分は存在しないではないか？
「なぜ僕は殺されず、僕と同年輩の広島の子供達は殺されてしまったのか？
「広島の子供達よりも、僕の方が生きる値打ちがあったからだろうか？
「いや、そんなことは有り得ない！
「では、僕は幸運だったと、喜んでよいのか？
「いや、広島の子供達の不運を嘆くことはできる。
「でも、自分の幸運を喜ぶ気持ちにはなれない。
「では、どうすればいいのか？

次々と脳裏に浮かぶ疑問や反省を重ねながら、ついに得たものは、

「僕は、広島の子供達の死を背負って、
その奪われた生命を引き継いで、
生きて行くべきではないか？」

という結論だった。

それ以来４６年間、大きなことは何もできなかったが、私なりに精一杯の祈りを込めて作曲したこの小曲、「ヒロシマ・ナガサキ追悼曲」が、カナダ聖公会の司教をはじめ、多くの人たちの共感を得ることができたことは、恵みであり、慰めであった。

国連の核廃絶宣言は採択されたが、まだ日本もカナダもそれを批准していない。

長崎の子供達が、「広島の友達は最初の犠牲者だった。そして僕たちは最後の犠牲者だった」と胸を張って言える日は、いつ来るのだろうか？